

令和 5 年 6 月 22 日現在

機関番号：24405

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K10953

研究課題名(和文) 急性心不全による活動耐性低下患者の回復を促進するための看護プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of Nursing Program to promote recovery of patients with activity intolerance due to acute heart failure

研究代表者

北村 愛子 (kitamura, aiko)

大阪公立大学・大学院看護学研究科 ・教授

研究者番号：90772252

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：急性心不全により活動耐性低下を呈する患者の回復促進のための看護プログラム開発を目的とし、活動耐性低下患者の経験と看護師の実践を元に初期プログラムを作成した。実施、評価後、改訂プログラムを作成し有効性を調査した。結果、活動耐性の生理学的指標からは有害事象はなく、せん妄は1例発症がみられたが、不安は実施前後で有意差はなかった。抑うつは実施後に有意に改善し、コンフォートはease、transcendenceで有意に改善がみられた。本プログラムは、患者の苦痛を緩和し、患者自身が自信をつけ、力が湧くといった効果を得た。看護師も内省することでケアリング能力が発揮でき改訂版プログラムの有効性が確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

集中治療を受ける活動耐性低下した急性心不全患者の回復過程を促進するための看護プログラムの効果が検証され、患者のQOL向上に向けた呼吸・循環管理、日常生活支援など、個別に応じた全人的ケアを行うことで、集中治療を速やかに終えて回復促進する看護実践への示唆が得られた。プログラム開発により活動耐性低下患者には、症状緩和やコンフォートケアが欠かせないことが明らかになり、集中治療退室後もコンフォートケアを継続し、長期的には心臓性うつやストレスの低減、日常生活のQOL改善への介入が見いだせると考える。今後増えていくであろう、心不全患者の活動耐性低下のケアの発展に寄与することができるように考えている

研究成果の概要(英文)： The objective is to develop a nursing program to facilitate the recovery of patients with decreased activity tolerance due to acute heart failure in the intensive care unit.

After the evaluation, a revised program was created and its effectiveness was investigated. As a result, from the physiological index of activity tolerance, there were no adverse events and one case of delirium was observed, but there was no significant difference in anxiety before and after the implementation. Depression was significantly improved after implementation, and comfort was significantly improved in ease and transcendence. In this program, the patient's pain was alleviated, and the patient gained self-confidence and gained strength. The effectiveness of the revised program was confirmed, as nurses were able to exercise their caring ability by self-reflection.

研究分野：臨床看護学

キーワード：急性心不全 活動耐性低下 回復の促進 看護プログラム

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

集中治療室における活動耐性低下の急性心不全患者は、筋肉の減少や身体可動性の低下を生じ、不動状態による無気力、うつ状態、自尊感情の低下を引き起こす。またストレスによって、せん妄や抑うつなど精神症状を併発し生命予後にも影響する。従って急性心不全の活動耐性低下患者の回復を促進するための看護ケアが必要であるが、これまで明らかにされていない。

2. 研究の目的

集中治療室において急性心不全により活動耐性低下を呈する患者の回復を促進するための看護プログラムを開発することを目的とした。

・用語の定義

活動耐性低下;必要な日常生活または望ましい日常活動を持続遂行するための、生理的あるいは心理的エネルギーが不足した状態。

回復;不安定や脆弱な状態が、以前よりも改善していくプロセスとした。

3. 研究の方法

(1)研究参加者:患者;原因は問わず急性心不全で NYHA 分類 以上の活動耐性低下状態で、集中治療室に 24 時間以上入室し、呼吸・循環状態が安定しており、自力座位の耐性テスト・訓練予定の者。看護師;集中治療室で 1 年以上勤務している看護師、および専門看護師。

(2)プログラム原案の作成:文献検討から、ストレスによる緊張亢進・交感神経興奮・酸素消費量増加が、活動耐性低下の要因と考えられたため、心負荷をかけずに活動耐性を高め、苦痛緩和を含むコンフォートケアの看護プログラム原案を作成した。看護プログラムは、1)活動耐性に関連する個人の特有な反応を把握する、2)活動耐性回復の阻害要因を取り除くまたは減少させる、3)活動耐性の促進要因を提供する、4)活動耐性を高めるコンフォートケアの 4 つで構成した。

(3)アクションリサーチのプロセスとデータ収集

Greenwood と Levin (1998) のモデルを基にした専門職的なエンハンスメントアプローチを参考に、以下のプロセスで進めた。〔局面 1〕プログラム導入前のケアの実際と看護師の認識、および活動耐性低下患者の経験を半構成的面接法で明らかにし、プログラム原案を洗練化した初期プログラムを作成した。〔局面 2〕プログラムを研究協力看護師に説明し実施した。患者からは、基本情報とプログラム実施前後の活動耐性成果指標、不安・抑うつ測定尺度(HADS)、せん妄尺度(ICDSC)、コンフォート測定尺度(VAS)をデータ収集し有効性を評価した。看護師からは、看護実践報告によるデータ収集を行った。〔局面 3〕プログラム実施上の困難と対処を明らかにするために、困難時に看護師から電話相談を受け内容をデータとした。プログラム実施後に看護師に対してグループインタビューで困難な点と対処内容を調査した。〔局面 4〕プログラムを評価するために、プログラムを受けた患者の経験と、プログラム実践後の看護師の認識の変化について半構成インタビューを行いデータ収集した。初期プログラム 1 回目の局面 2~4 のプロセスによる課題をもとに改訂プログラムを作成し、2 回目の局面 2~4 のプロセスを実施した。

(4)分析方法:量的データは、事例毎に介入前後の変化を記述分析、およびプログラム実践前後の測定尺度の有意差検定を実施した。活動耐性の変化は、プログラム実践による患者の主観を数値化し、看護成果尺度及び生理学的指標の増減をグラフ化し評価した。質的データは、対象者の語りを逐語録にし、語りの意味内容をコード化、類似したものをまとめ、カテゴリ化した。

(5)倫理的配慮:研究者の所属施設および研究協力施設の倫理審査の承認を受け実施した。

4. 研究成果

(1)研究参加者:局面 1 は、1 施設の患者 10 名、看護師 11 名。初期プログラム:局面 2~4 は患者 7 名、看護師 26 名。改訂プログラム:局面 2~4 は 2 施設の ICU 患者 10 名、看護師 24 名、専門看護師 2 名。

(2)局面 1

活動耐性低下患者の回復を阻害する経験として【発作時の苦痛症状の記憶】【活動できない辛さ】【口渇の苦しさ】【眠れない苦痛】【倦怠感がある苦痛】【人との関わりの苦痛】【役割が果たせないストレスがある】【記憶がなく考えられない】【自分に対する苦悩】【先行きの不安定さ】【苦しみに耐えられず死を意識する瞬間】が明らかになった。患者は、呼吸困難のケアや飲水の支援、

活動、日常生活の支援など基本的ニーズを満たす支援、看護師の親切な対応、家族のサポートを希望していた。看護師は、【呼吸困難の症状緩和ケア】と【除水による症状緩和】【安静療法が守れるように支援する】【観察しながら活動負荷をかける】【日常性を高める】支援を行い、【患者の意欲をささえる】【安心を提供するケア】【家族との対話を支える】ことが必要だと認識していた。これをもとに初期プログラムに反映した。

(3) 初期プログラム：局面 2~4

初期プログラム実施の結果、活動耐性の生理学的指標からは有害事象はなかった。せん妄発症はなく HADS 全体としては上昇がみられた。コンフォートは、relief、ease、transcendenceにおいて、実践後に上昇がみられたが、対応サンプルが 3 例しかなく検定は実施できなかった。患者は尿管の痛み、腰痛、強い倦怠感、拘束感、睡眠不足を経験しており、苦痛緩和を重視する必要があった。特に口渇による苦痛、食事が食べにくい、清潔の支援のニーズがあった。プログラムの実施率は平均 58%で、看護師からは実施項目のチェックリスト化や具体例提示のニーズがあった。実施率の低い項目の必要性の検討と患者、看護師のニーズを元に 47 項目のケア内容を整理し、改訂プログラムを作成した。

(4) 改訂プログラム：局面 2~4

改訂プログラム実施の結果、活動耐性の生理学的指標からは、有害事象はなかった。せん妄は 10 例中 1 例発症がみられたが、不安は実施前後で有意差がなかった ($p=0.671$)。抑うつは、実施後に有意に改善し ($p=0.034$)、コンフォートは ease ($p=0.015$)、transcendence ($p=0.036$) で有意に改善がみられた。relief は有意差がなかった。患者の経験は【心地の良いケアで安らいだ】【呼吸がしんどくなくなり不安がなくなる】【動くことで自信をつけたい】と意欲が支えられ、【ケアで安心し癒される】という内容であった。改訂プログラムの実施率は平均 88%で、主に活動耐性低下を診断し、基本的ニーズを満たすケアとバランス保持、対話し苦痛を和らげるケアを実施していた。実施率は低い家族ケアやリフレクション、リラクゼーションも実施していた。リラクゼーションについては、看護師の語りからはわかりにくさがあるという課題が明らかとなった。プログラム実施後の看護師の認識は、自分の看護を考える機会になった、患者と共に進むことができた、看護が明確になり継続できたという内容だった。専門看護師からは、看護師が安全にケアの判断ができる点や苦痛や苦悩を観て患者に負担をかけない考え方に变化したという評価を得た。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------